

伊呂波歌

●いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむ
うるのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす

色は匂へど 散りぬるを
(いろはにおえど ちりぬるを)

我が世誰ぞ 常ならむ
(わがよたれぞ つねならん)

有為の奥山 今日越えて
(ういのおくやま きょうこえて)

浅き夢見じ 酔もせず
(あさきゆめみじ えいもせず)

花は色艶やかに咲くけれども、間もなく散り果ててしまう。

人間の命もこの花と同じであって、永久に生き続けることはできない。

それだから、空しい夢を見たり、人情におぼれたりする浮世(つらくは

かない現世)の煩惱(悟りを妨げる人間のさまざまな心の働き)の境地か

ら逃れて、ひたすら仏様にすがって往生(極楽浄土に生まれ変わる事)

を祈ろう。

(平安時代中期)

※仏教の根本思想である「諸行無常(万物は絶えず移り変わり 生滅す
るもので、不変なものではないということ。)」の精神を詠したものです。

※浮世…辛くはかないこの世。

※煩惱…悟りを妨げる人間のさまざまな心の働き。

※悟り…真理を会得すること。

※往生…極楽浄土に生まれ変わる事。

※極楽浄土…苦しみのない安楽の世界。

新伊呂波歌

■ちなみに以下は、明治三十六年、黒岩涙香氏の主宰する新聞「万朝報」で
「国音の歌」として「ン」を入れた四十八字の歌を懸賞募集した際に第一位
を獲得した、埼玉の坂本百次郎という人の作による「新しいは歌」です。

鳥なく声す 夢さませ
(とりなくこゑす ゆまさませ)

見よ明けわたる 東を
(みよあけわたる ひんかしを)

空色映えて 沖つ辺に
(そらいろはえて おきつべに)

帆ふね群れぬ もやのうち
(ほふねむれぬ もやのうち)

鳥のさえずりが聞こえてくる。夢から醒めようか。

見てごらん、明け渡る東の空一面を。薄明鮮やかに、

沖の方には、帆船が幾艘も群れ漂っている。

静かな朝霧の中に。